

○最上川谷地押切渡より柏沢迄絵図

卷子本 乾六七・五×七三三・五 坤六七・五×六六一・五

延享三年（一七四六）

致道博物館（鶴岡市）

山形県指定有形文化財（平成二年）

庄内藩主酒井家旧蔵本。乾・坤二巻からなる。

巻物および折畳み式の最上川関係絵図の中では最も大きく、描き方も精密で豪華である。

絵図は、右側を上流、左側を下流として描いている。したがって、上方が右岸、下方が左岸となっている。描写方法は展開法をとり、川を中心に兩岸を俯瞰する形で描かれている。風景等は原則として川を正面として描かれているが、注記の文字の記入方向はまちまちでかなり見にくい。ただし、川の中の岩礁や瀬・洑等の注記は上流を上にしてあり、展開法は下流を下にして縦に置いて見るように描いたものとみることができている。

最上川中流、谷地（河北町）から清川までを範囲としているが、これは兩岸または一方が新庄藩領となっており、新庄藩に関わる絵図とみることができる。

川の流れは青色、山々や樹木は緑で描き、村々は家並みと樹木でその位置を示して村名を注記し、赤の線で村々を結ぶ道路を表している。さらに、新庄藩領の村々の領域を黄色で塗って他と区別している。これは、坤の奥書の最後にある「延享三丙寅歳四月下旬 岩間作右衛門」という記載と相まって、この絵図が新庄藩によって描かれたものであることを示している。岩間作右衛門は当時新庄藩郡奉行であるからである。ただ、奥書の内容と絵図の記載内容との矛盾から、絵図の作成は延享三年（一七四六）よりさかのぼると指摘されている。

土生田（村山市）・横内（尾花沢市）・臈氣（同）等、一部ではあるが、最上川の川筋からかなり離れた羽州街道沿いの村々も描かれている。

難所はかなりくわしく描かれ、特に三難所の一つ、基点は岩礁にもそれぞれ名称が付されている。

寺社・堂舎も数多く描かれ、三ヶ瀬付近、大淀（村山市）の羽黒堂や猿羽根山（舟形町）の地藏堂、本合海（新庄市）付近の谷向大明神、小外川（戸沢村）の仙人掌（仙人掌）等々は特に信仰を集めたものであろう。

新庄藩領と天領や庄内藩領との境界には境石や分杭が建っていたことがうかがわれ、白鳥（村山市）には新庄藩の米出場、古口（戸沢村）の対岸には番所があり、大浦（大石田町）から藁沓街道と呼ばれる道路があり、稲沢（大蔵村）からは永松銅山への道路が通じていたことがうかがわれる。

坤の奥書は上段と下段になっており、引用文は上段に記されている。下段には「清水より柏沢まで道程」が一里ごとに列記されており、岩間作右衛門の署名がある。

この奥書を検討すると、前述のように、延享三年の奥書と水路図は別物であり、当時新庄藩郡奉行であった岩間作右衛門が新庄藩領域の最上川水路図を庄内藩との藩領問題で再利用したのではないかと思われる。水路図自体は延享三年以前に作られており、所蔵者の庄内藩は作成とは無関係であったろう。

参考文献

小野寺淳「絵図にみる最上川の空間認識」『流域の地方史―社会と文化』雄山閣出版（昭和六〇年）

金山耕三「資料紹介・最上川絵図」『山形県立博物館研究報告第7号』山形県立博物館（昭和六一年）